

幼児の使用する日本語オノマトペの音韻分析

丹野 眞智俊

key words : オノマトペ, 音韻, 音素

1. 目的

今日まで日本語オノマトペ, いわゆる擬音語, 擬態語に関する研究報告は枚挙にいとま声ないほどである。いわく, 音象徴, 音節の分類, 統語的使用などにおよぶ。: 特に音象徴に関する研究は, sp 法の適用と相俟って, 国の内外において盛んに行われてきた。その結果, その存在らしいものは, 見られるがそれはさして明瞭で一義性のあるものではなかった。一方, オノマトペは, 幼児の言語発達研究に供されてきた。しかし, この研究も幼児語という認識のもとに行われているものが多く, 音韻の発達, 音節の pattern と年齢との関係などの観点から取り上げられているものはあまりない。そこで, 本調査は, 幼児期(2歳6ヶ月~6歳6ヶ月)において音韻など年齢とともにどのように変化していくのかについて, 7日間の残置調査を試みた。

2. 調査方法

被調査者: 佐賀新聞めばえ教室に通う幼児(2歳6ヶ月~6歳6ヶ月)300人を対象とした。調査表には, 下記のような調査の趣旨を記した。「私たちは, 日頃, 幼児との対話で犬のことを“ワンワン”人の歩く様を“ヨロヨロ”と表現することが数多くあります。これらの言葉は, 擬声語, 擬態語(ラテン語でオノマトペ)と言い, 幼児の言語発達上, 重要な働きをしています。特に日本語の音韻学習, 物に名前があることの学習などの基本となっています。日常生活の中で母親をはじめとする周りの大人との会話中, よく使われます。これらのオノマトペを収集, 整理, 分析することは, 幼児の言語発達を知る上で, おおいに有意義なことと考えられます。」

調査手続き: 佐賀新聞めばえ教室に通う幼児の保護者に上記「調査の趣旨」を掲載した調査表が配布された。調査表は, 幼児の氏名, 年齢, 性別, 記入者氏名, 記入例, 簡単な質問, 7日分の記入欄(オノマトペを使用した日時, 使用した人, 使用した状況)で構成されている。調査表は, 7日間残置した。

調査期間：1997年10月1日～1997年10月7日であったが、行事などのため記入もれもあったので10月31日までを期限とした。回収率は50.9%であり、最終的な被調査者は163人であった。

整理方法：被調査者の年齢は、2歳6ヶ月から6ヶ月刻みに8区分（A.B.C.D.E.F.G.H）とした。調査表に記入されている幼児の使ったオノマトペを各区分別にK.Jカードに書き取り50音図にのっとり音節の小さなものから大きい順に整理した。例えばゴシゴシの場合は「が行」の「お」と数えた。オノマトペは全部で1,375個あった。

表記の判定：記入者である保護者が表記したオノマトペの音韻をそのまま書き写した。すなわち、幼児の音韻は、保護者の聴取した音韻そのものとは相違しているかもしれないが、彼らは常に周囲にいてその幼児の言葉を聞き知っている所以他们の判定に従った。

3. 結果

各行（あ行など）、各母音（ゴシゴシの場合、GOの「お」など）の観点から整理した結果が、Table 1のA～H、Fig. 2のA～Hである。

Table 1のAをみると各行、各母音でオノマトペの使用率が相違している。すなわち、濁音（「が行」など）、半濁音（「ば行など」）が、清音（「か行」など）よりも多く使われている。しかし、「た行」は、多いのに「だ行」は少ない。「た行」で多いのはTIである。この音韻は、TYU（チュ）であるが、日本語音韻Tiが頭にきているので「ち」と分類した。A区分の幼児に「ち」が多いのは、「チュッ」、「チュルチュル」など多用されているからである。各母音の場合をみると、母音Iが圧倒的に多く、母音Eが少ない。

Table 1Bから、各行は、区分Aと同じような傾向を示している。各母音は、母音Eを除いて他は大体均等である。

Table 1Cから、濁音は、各行区分A、Bの傾向と似ているが、清音「た行」が半減している。母音は、区分A、Bと類似している。

Table 1D、1E、1F、は各行、各母音ともTable 1Cと相似た傾向である。ただ、Table 1Fの「ま行」の使用が増えている。これは、Table 1Eにも現れている。

Table 1G、Table 1Hを合わせてみよう。1Gの各行では、「た行」が激減している。他は今までみてきた区分とあまり変わらないし、母音も同じ傾向である。

Table 1Hでは、各行の「が行」の増加が目立つ。母音の動きは、ほとんどみられず、いずれの区分においても一貫していた。

Table 1A 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率	
あ	3	3	1	2						8	5			2	4	28	16.28
い		3	11	19	5	1					1	14		3	11	68	39.53
う	1	2		1		6					6			11	2	29	16.86
え	4													2	7	13	7.56
お		2		1	1		3	1			9	1	5	1	10	34	22.09
計	8	10	12	23	6	7	3	1	0	8	21	15	5	19	34	172	100
率	4.65	5.81	6.98	13.37	3.49	4.07	1.74	0.58	0	4.65	12.21	8.72	2.91	11.05	19.77		

Table 1B 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率	
あ	3	3	1	2							5			2	4	28	16.28
い		3	11	19	5	1					1	14		3	11	68	39.53
う	1	2		1		6					6			11	2	29	16.86
え	4				1									2	7	13	7.56
お		2		1	6		3	1			9	1	5	1	10	34	22.09
計	8	10	12	23	3.49	7	3	1	0	8	21	15	5	19	34	172	100
率	4.65	5.81	6.98	13.37	0	4.07	1.74	0.58	0	4.65	12.21	8.72	2.91	11.05	19.77		
	16.667	2.6316	0.8772	0	1.75	7.89	14.91	4.39	1.75	18.42	12.28						

Table 1C 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率	
あ	9	6	9	2	1	1				6	15	7		10	14	80	25.6
い		5	7	15	5	2			1		4	14		5	29	87	27.9
う		2	7	3	1	8					17	1		22	3	65	20.8
え		2					1				1			7	7	18	5.77
お		13		6	2	1	5	3			14		8	1	9	62	19.9
計	9	28	23	26	9	12	7	3	1	6	51	22	8	45	62	312	
率	2.8846	8.9744	7.3718	8.33	2.8846	3.8462	2.2436	0.96	0.32	1.92	16.35	7.05	2.5641	14.423	19.87		

Table 1D 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率	
あ			7							9	17	5		11	12	61	25.00
い		3	4	16	4	4			1		3	8		3	17	63	25.8
う		13	5	5		7					7	1		7	7	52	21.3
え	4										1			4	5	14	5.74
お	1	5	2	8	1		1	4			13		5	7	7	54	22.1
計	5	21	18	29	5	11	1	4	1	9	41	14	5	32	48	244	
率	2.0492	8.6066	7.377	11.885	2.0492	4.5082	0.4098	1.64	0.41	3.69	16.8	5.74	2.0492	13.115	19.67		

Table 1E 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率
あ	1	4	4			1				6	9	2	4	5	3	24.8
い		1	8	5	4	4			1	1	1	3		6	9	27.4
う	2	1		6	1	6	1	1			9			9	2	24.20
え	2													7	2	7.01
お			1	1			5	3					6	5	5	16.6
計	5	6	13	12	5	11	6	4	1	7	19	5	10	32	21	157
率	3.1847	3.8217	8.2803	7.64	3.1847	7.0064	3.8217	2.55	0.64	4.46	12.10	3.18	0.6369	20.382	13.38	

Table 1F 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率
あ		4	1	2	1				1	5	11		3	7	4	24.4
い		2	4	14	3	3					1	7		3	9	28.8
う		3	8	2		3	1	1			4	1		6	29	18.1
え						1	1							5	3	6.25
お	1	4	1	4			6	1			6		5	2	6	22.50
計	1	13	14	22	4	7	8	2	1	5	22	8	8	23	22	160
率	0.625	8.125	8.75	13.75	2.50	4.375	5.00	1.25	0.63	3.13	13.75	5.00	5.00	14.975	13.75	

Table 1G 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率
あ	2	1							1	7	4			9	3	20.9
い		1	2	3	3	2			2		2	7		5	3	23.3
う		4	6	2		1		2			7	1		16	3	32.6
え	1	2												3	4	7.75
お		2			1		3	1			5		1	4	3	15.5
計	3	10	8	5	4	3	3	3	3	7	18	8	1	37	16	129
率	2.33	0.7752	6.20	3.88	3.10	2.33	2.33	2.33	2.33	5.43	13.95	6.20	0.7752	28.68	12.40	

Table 1H 各行と母音との関係

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	が	ざ	だ	ば	計	率
あ	2	2	2			1				1	4	1	1	2	1	20.7
い		4	1	1	1				1		5	2		3	8	31.7
う		6	2	1			2				3	2		4	20	24.4
え					1									1	1	3.66
お		2					5	2			2		2	2	1	19.5
計	2	14	5	2	2	1	7	2	1	1	14	5	3	12	11	82
率	2.439	17.07	6.10	2.44	2.439	1.2195	2.439	2.44	1.22	1.22	17.07	6.10	3.6585	14.634	13.41	

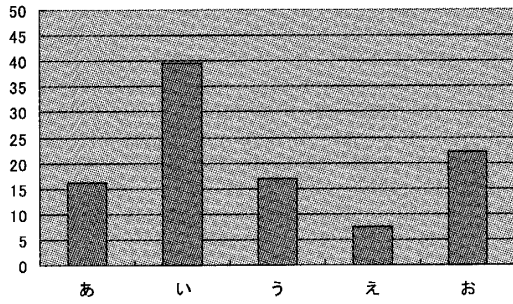


Fig. 1A 発達段階と母音との関係

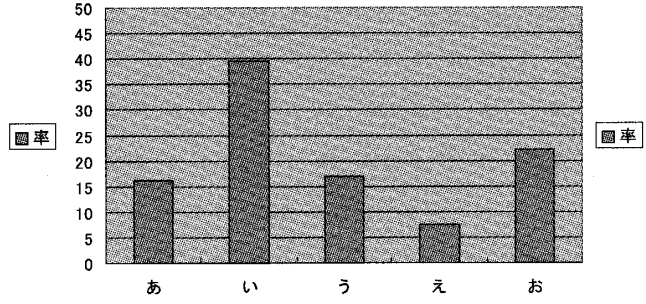


Fig. 1B 発達段階と母音との関係

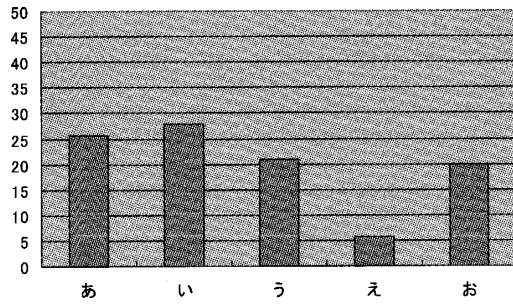


Fig. 1C 発達段階と母音との関係

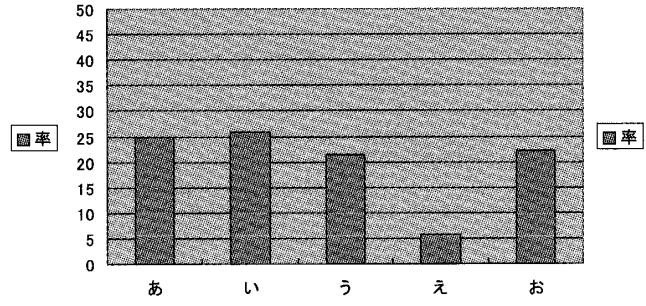


Fig. 1D 発達段階と母音との関係

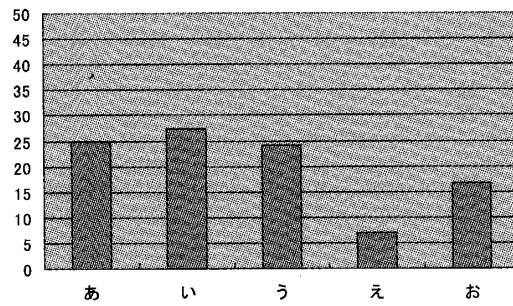


Fig. 1E 発達段階と母音との関係

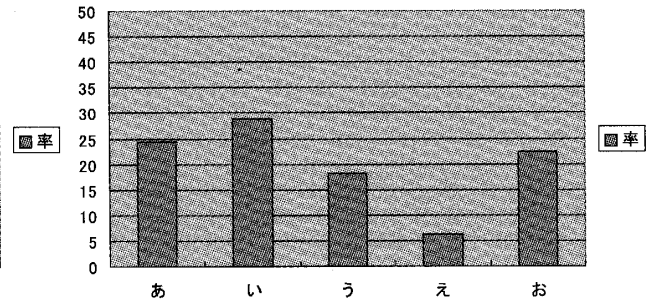


Fig. 1F 発達段階と母音との関係

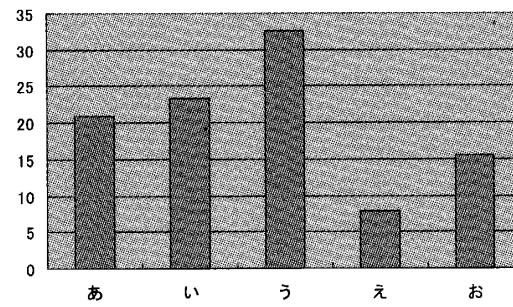


Fig. 1G 発達段階と母音との関係

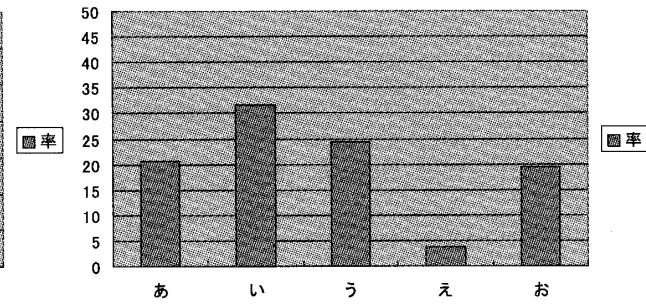


Fig. 1H 発達段階と母音との関係

4. 考察

幼児は、圧倒的に濁音を使用することがわかった。このことは、各区分においていえることである。これら、有声音は、幼児にとって調音のしやすさなどの結果であると考えられる。区分Bまでは出現率0のところがあるが、それ以後の区分には、0は見られず音韻の発達、パテエティーに富んでいることがわかる。また、母音Eは、どの区分においても最少であった。

なお、Table 2の発達段階の相関係数についてみると一般的に各段階かなり高い相関関係にあり、各音韻の出現が同じような現象にあることを示している。

Table 2 発達段階の相関係数

	A	B	C	D	E	F	G	H
A	1.00							
B	0.81	1.00						
C	0.92	0.81	1.00					
D	0.94	0.87	0.98	1.00				
E	0.73	0.81	0.83	0.81	1.00			
F	0.92	0.81	1.00	0.98	0.83	1.00		
G	0.59	0.73	0.72	0.66	0.92	0.72	1.00	
H	0.61	0.69	0.85	0.78	0.65	0.85	0.61	1.00

5. 要約

幼児の使用するオノマトペについて一週間の残置調査を実施した。回収率は、50.9%であり、163人であった。また収集したオノマトペは、1,375個であった。

結果は、各発達段階（2歳6ヵ月から6ヵ月刻みに8区分（A～H））の出現音韻を分析したが、だいたい同じような傾向であった。

なお、本研究報告は、荒い分析に留めているが、この発展は、参考文献にあるような報告も行なっている。

6. 参考文献（より発展的な報告）

1. 石橋尚子, 丹野眞智俊, 有働眞理子, 小谷欣也 2003.3 幼児の使用する日本語オノマトペに関する基礎的研究(1) 日本発達心理学会第14回大会発表 兵庫教育大学
2. 石橋尚子, 丹野眞智俊, 有働眞理子 2004.3 幼児の使用する日本語オノマトペに関する基礎的研究(2) 日本発達心理学会第15回大会発表 白百合女子大学
3. 石橋尚子, 丹野眞智俊, 有働眞理子 2004.10 幼児の使用する日本語オノマトペに関する基礎的研究(3) 日本教育心理学会第46回大会発表 富山大学